

## 経済性と環境性の両立を目指して



川瀬 千尋 (かわせ ちひろ)

北海道様似町出身。高校卒業後、陸上自衛隊勤務を経て、不動産会社に12年あまり勤務。2020年7月からは、池田町地域おこし協力隊として、「自伐型林業の推進」を柱に活動している。自立した森林経営と不動産経営の両立による地域定着の道を探るとともに、持続可能な林業経営と森林の持つ多面的・公益的機能の維持向上につながる仕組みづくりを目指している。

私は北海道の様似町出身で、幼い頃から自然に恵まれた環境で育ちました。様似町は山と海に挟まれた地域で、遊ぶときは山菜採りをしたり、潮干狩りをしたり、釣りをしたりと、今思えばその季節に合った自然との遊び方をしていたように思います。

林業を目指すことになったのは、そんな幼い頃の思い出がきっかけになっています。

### 【将来のビジョンと一致する、協力隊の募集】

高校生の頃に読んだ本の影響で賃貸不動産経営を目指していた私は、高校卒業後に陸上自衛隊で2年間過ごした後、帯広市内の不動産会社に就職しました。

自分が働いてお金を稼ぐのではなく、お金の稼いでもらうことができれば、好きなことをしながら生活できる——そんな考えを持っていたため、日々学びながら将来の生活について考えていました。

そんな時に出会ったのが「自伐型林業」という、林業のカタチです。自伐型林業は昔ながらの林業で、間伐を繰り返しながら間伐材で収益を上げ、大径木を育成する「長伐期多間伐施業」を行います。皆伐（すべての木を伐って収穫する方法）ではなく択伐（伐る木

を選んで収穫する方法）を行うことから、森の環境を維持したまま林業を行うことができます。山菜やきのこが好きな私にとって、森の環境を維持しながら森に関われるのはとても魅力的でした。自分が管理する森なら、いつ、どこで、どんな山菜が収穫できるかを把握することができるからです。そして、自伐型林業なら木材販売などで収益を得ながら、旬を逃さず山菜を収穫することができます。こうして、私の将来的な目標は自伐型林業での起業となり、仕事をしながら情報収集を始めました。情報収集をする中で、2020年2月に自伐型林業の推進をミッションとして地域おこし協力隊の募集を目にします。それが、中川郡池田町の地域おこし協力隊「林業推進員」の募集でした。

池田町は協力隊を募集する前から自伐型林業について取り組んでいて、民間の人を巻き込んだ様々な勉強会や研修を行っていました。何も基礎がないところからだと時間がかかりますが、池田町ならもうすでに基礎や知識があります。将来的に起業を目指す私にとって、このノウハウは非常に魅力的でした。しかも、地域おこし協力隊は最大で3年間の雇用であることから、3年間という準備期間もあります。いきなり独立する場合は収入の保証がないものの、準備期間があると知識・技術の習得、広報活動や市場の調査など、収益が上らない取り組みにも積極的に着手できます。そのため、思い描いていたスケジュールを前倒しにする価値は十分にあると考え、池田町の地域おこし協力隊に応募することとなりました。

### 【これまでの活動と、山主との出会い】

採用後、1年目は自伐型林業の知識・技術を習得することを目標に活動しました。

北海道における自伐型林業は広葉樹を中心に行いますが、この広葉樹施業についてはまだ実施されてから日が浅く、知識・技術・販路などが多くはありません。そのため、池田町が実施している町有林間伐事業（町有林を民間有志の人と間伐する事業）へ参加し、先輩たちから伐倒の技術や木の見方などを学びました。その他、北海道自伐型林業推進協議会での研修に参加することで、知識や技術だけではなく、同じ目標を持つ

仲間も増やすことができました。本やインターネットだけでは得られない情報がほとんどで、かつ、現在活動している方からの生きた情報を得られるので、非常にためになりました。

採用から6カ月経ったころ、池田町に山林を所有する山主の方とお話しをする機会がありました。話を聞くと、遠方に住んでいて山林の管理をするのが難しいこと、またこの山林を地域貢献として活用していきたいことなど、山林について悩まれているとのことでした。そこで、学んだ知識・技術を実践で学ぶ機会をいただけないかというこちらの要望をお伝えし、快く山林の管理をさせていただくこととなりました。

現在はこの山林に作業道を敷設したり、間伐を行ったりと、学んだばかりの知識・技術をよりレベルアップさせるため、同じ協力隊の仲間とともに森づくりを行っています。若輩者の私たちにこのような機会を与えてくれた山主の方には大変感謝しており、これからも山守（山林を管理する者）として、しっかりと森を作っていきたいと考えています。

#### 【やりがいと課題】

自伐型林業を実際にやってみて、とてもやりがいを感ずるとともに、課題も感じています。やりがいとして一番強く感じる部分は、森から良い影響を上げることができている点です。森には生産、生物多様性、防災、レクリエーションと、様々な機能があります。自伐型林業は間伐を繰り返すことで森の環境を維持しながら収益を上げる仕組みとなっているため、そこに住む生物の命を守りながら林業を行うことが可能です。



間伐の様子

管理させていただいている山林での一コマ。作業道づくりの支障になったり、他の木の成長を阻害していたりする木を伐採する。失敗すると事故につながるため、知識と技術が必要。

また、森の環境を維持しているため土砂災害の発生を抑制することができるとともに、森が保水力を持つことで氾濫や渇水を防ぐ機能も果たせます。そして、道ができることで人が森に入る機会を作ることができ、森林浴や森遊びなど、里山としてたくさんの人に喜んでもらうことができます。小規模な林業だからこそ、このような機能を維持したまま収益を上げることができ、とても公共性が高い仕組みだと感じています。

課題として挙げられるのは、収益性の面です。自伐型林業は、投資信託をイメージしていただくと分かりやすいかと思います。元本が森にある木の総量だとすると、毎年少しずつ木の総量が増えて（森にある木が太くなって）いき、増えた総量よりも少ない量を収穫することで、元本を増やしながらかつ少しずつ利益を得ることができます。この元本が多いほど多く収益を上げることができますが、始めたばかりでは元本が少ないため、多くの収益を上げることができません。また、広葉樹は販路も多くはないため、現金化するのも手探りとなります。

このような課題はあるものの、それ以上にやりがいを感ずられるのが自伐型林業だと感じています。

#### 【最後に】

卒業後は、池田町に残って自伐型林業と不動産業での起業を考えています。

地域おこし協力隊という貴重な機会をいただけたことに感謝し、残りの期間でしっかりと準備して、地域に貢献できる林業者になりたいと思います。



販売用白樺薪

生産した白樺の玉薪を販売している様子。玉薪は30cm程度にチェーンソーカットした丸太で、そのまま斧で割れば薪として使用可能。試験販売会を実施したところ、キャンパーや薪ストーブユーザーに人気だった。